との戰爭の如きは一人として父母妻子などが敵國へ捕虜になるといふやうなことは無いのであるから、かゝる悲しい出來事は絶えて無いはずではあるけれども、凡そ軍國の人民としての決心は必らず斯くまでに定めて置かねばならぬのである。

已に斯くまでの決心が定まつていつ何時でも心のこりなく命を捨てゝ國に盡そうとの心ざしが確立した上には其れより上の大事は無い、此上もなき大切の命を惜まぬといふことにさへなれば其他の事は如何なる難儀も辛勞困苦は物の數ではないに依て、軍國人民の義務を十分に盡して、決して出征軍人に後髮を引かれるやうな心配を掛けないやうにすることは誠に容易なわけではあるが、事實中々容易なことては無いに依て、賴む所は佛祖の御教訓を眞實信心決定して、何事も皆利生の發願よりあらはれて出る報恩の行持となるやうにするより外は無い、其れに就ては先づ第一に篤く因果の道理を信じて、至心懺悔の一念に無始劫來の罪障を消除し、受戒入位の身となつて此身此儘、三世の諸佛と同道同行の證果を得るが、何より肝要の

一大事であるが、其れは常々申し諭してある通りのことであるに依て、今日は先づ軍國民の心得として、宗祖大師の御教訓を兩三箇條紹介に及んだまてのことである。

壽老人　　吉祥山人

感應道交泰運開。
和生神變自消災。
無邊福德無量壽。
寒苦他經春入梅。

一十四法明りな洋手の公經仲に書の右左りな號の鈴禪山居者を永に依大
年公が寶竹ゆるるくに際し紀念として禪師に贈呈せられたるものなり

五　性海一滴

○幼にして脱塵の志あり

禪師は森田常吉氏の第二子として生れ、父母の寵愛至らざる所無きも、夙に脱塵の志を懷き、居止自ら他の兒童に異なるものあり、當時の風習として兒童の頭髮を剃るに孕髮を殘すを常とす、然るに禪師は之を殘すことを欲せず、悉く之を剃り落し、他の兒童の嘲弄を受くるも少しも意に介せず、朝夕の食膳魚鳥を口にせず、父母に向つて常に出家を請うて止まず、父母は寵愛の餘り之を出家せしむることを欲せず、再三之を止むれども請うて止まざるを以て、遂にその意に任せ、名古屋の大光院泰門和尚の室に投じて出家せしむ。

○禪師の苦學富豪を感動す

禪師の師事せる泰門和尚は紀州に行化し、歸途病に罹りて遂に遷化す、此時禪師甫めて十四歳、此の不幸に接し、修道の便を缺くこと尠からざりしも、禪

五　性海一滴

○幼にして脱塵の志あり

禪師は森田常吉氏の第三子として生れ父母の寵愛至らざる所無きも、夙に脱塵の志を懷き、居止自ら他の兒童に異なるものあり、當時の風習として兒童の頭髮を剃るに孚然を殘すを常とす、然るに禪師は之を殘すことを欲せず、悉く之を剃り落し他の兒童の嘲弄を受くるも少しも意に介せず、朝夕の食膳魚鳥を口にせず、父母に向つて常に出家を請うて止まず、父母は寵愛の餘り之を出家せしむることを欲せず、再三之を止むれども請うて止まざるを以て遂にその意に任せ名古屋の大光院泰門和尚の室に投じて出家せしむ。

○禪師の苦學富豪を感動す

禪師の師事せる泰門和尚は紀州に行化し、歸途病に罹りて遂に遷化す、此時禪師甫めて十四歲、此の不幸に接し、修道の便を缺くことからざりしも禪

大休禪師猊下

公爵徳川頼倫博士贈呈

大休は永平寺悟由禪師の號なり左右の書は伊藤公の手澤なり明治四十年公爵徳川頼倫博士が韓國に渡るに際し紀念として禪師に贈呈せられたるものなり

師の志氣金鐵の如く、世は行乞して僅に身命を支へ、夜は打座に勉學に暫時も放過することなし、名古屋の富豪森本善七、その志操の堅固にして行持の綿密なるを見て大に感じ、之が外護の任に當り、修學の便を得せしめたること尠からざりしと云ふ。

○禪師の陰德塾生を感化す

禪師の駒込の栴檀寮に在るや、傍ら東條一堂の門に學ぶ、一堂は當時神田に講帷を張りて名聲噴々たるを以て教を請ふもの頗る多く、その塾生多くは粗豪なるを以て、大小便所の如き常に汚瀆足を容るゝに地無きが如し、禪師之を遺憾とし、講席に列するに先ち、窃に之が掃除を爲す、かくすること數ヶ月、塾生未だその何人の所以なるを知らず、當時の塾頭那珂通高之を探求して始めて禪師の爲す所なるを知り、深く禪師に向て慚謝し、塾生亦た禪師の道業に感ずる所あり、以後互に相誡めてその粗豪を改め、又大小便所は塾生間にて毎日輪番を以て洒掃するに至れりと云ふ。

○沒可把

明治十一年の秋、永平寺二世孤雲禪師六百回の遠諱を修す。冥庵、活宗、玄朗、良範、鼎三等の諸老宿を始め、全國の宗匠殆と殘らず祖山に拜登し、江湖の雲衲集まる者無慮數千人、閣山立錐の地を見ざるの盛況にして、日々佛殿にて小參商量ありて殆ど虛日なかりき、而して雲衲は四方より集りたる烏合の衆なれば、進退威儀共に規律なく、各處の單頭都管の人々は皆その監督に困却せり、小參の時は、各先を爭うて進み出て、我儘勝手なる言語擧動をなし、一方の宗匠も一たび小參に出れば、忽ち問答の間に、雲衲の爲めに嘲笑罵倒せられ了はる、一日午後の小參に一二の智識問答の後、濤聽水和尙警策を把つて曲親に倚る、例によつて銅頭鉄額相踵いて出て來り、商量浩々地、觀る者堵の如き中に立つて、聽水、機辯捷疾、雷喝雨棒殆ど應接に遑なし、一個の獰龍躍り出て、數回問答の末、熱拳をかためて聽水の肩を打つ、聽水怒つて棒を行せんとしたるに、獰龍飜轉して打つこと能はず、聽水忿恚すれども如何ともする能はず、獰龍の冷罵口を衝いて止まず、都管間に入つて漸く退席せしむ、最後に曲親にあらはれたるは、禪師なり、禪師この時加州金澤天德院に住し、三

十餘人の隨身を率ゐてきたり、僧堂の單頭をつとめらる、小參の釣語下るや、問話の雲衆例によつて突進す、某問ふて曰く、如何なるか是れ佛、禪師曰く、沒可把、如何なるか是れ法、沒可把、如何なるか是れ僧、沒可把と、その外、祖師西來意、和尙家風、當山風光等如何なる問にも、只沒可把の一語を以て答へられたが最後に前の獰龍出て來つて詰問するも、亦沒可把を以て答ふ、獰龍は再び禪師の肩上に向つて一拳を打す、禪師微笑して只沒可把といふのみ、獰龍怒つて禪師を推倒せんとすれども、泰然として動かざる盤石の如くなれば、遂に閉口して退席せり、この樣子を見たる大衆は、復た進むの勇氣を失ひ、續て出るもの無く、悉く散堂す、これより沒可把の一事閣山に知れわたり、僧堂、法堂、庫裡、三門、東司、浴室、到る處雲衲の出逢ふ毎に、互に沒可把々々と叫びたりと。

○變に處して泰然

明治廿七年の秋、永平寺出張所の未だ芝公園辨財天祠畔に在りし時、忽然大震あり、轟然として厨裏の土壁崩壞したると同時に、禪師居室の邊にも大な

る準をなす、侍局のもの疾く趨りて到りて見れば、居室の前にある土藏の屋根は半ば崩れ落ち、背後の土壁も亦崩れ落ちて、砂烟濛々として咫尺を辨せざるの有樣なりき、侍局の某は、禪師樣と叫んで近づかんとすれば、禪師は、危ないから來るてないと仰せられければ、進みかねて暫く立ち止る、砂烟は漸く收まつて、禪師は紗の直綴を着して、案に凭り書を手にしたるまゝ、端然として兀坐し給へり、地震全く收まつて後拜謁のものに示して曰く、古老の說に、地震に二種あり、ぐら〳〵と横さまに搖くのは、震動は劇くても、家屋の倒れることは無く、家屋の顚覆し、又は地下に落ち入るやうなる大震は、初めより縱に動搖して、その勢甚だ急てあるから、屋內より飛び出る間はないといふことてある、それゆえ地震の時に馳け出す時は、屋瓦等の飛び落ちるのに中つて、負傷することがある、若し又家屋顚覆するやうなことがあつて、梁や棟の下に、ハサマッて、幾多の負傷はしても、壓死するやうなことは極めて稀れてある、萬一壓死する位の地震ならば、如何にしてもその災は免れることは出來ぬ、それだから地震の時は狼狽して屋外に馳け出すものでない」と諭されたりと、曾て古老の說を聞きたりとも、平素修養の功なければ、斯る時に泰然不動かくのごときことは出來得るものにあらず。

○禪師と平沼專藏

禪師一日汽車中に於て、平沼專藏と室を同うす、平沼氏曰く私も三十歲頃迄は博奕も打ち、酒も三升位飲みましたが、赤貧骨に徹ましたから、何んても金を儲けなくてはならぬと思ひまして、兩方ともフッツリと絕ち、朝は三時に起きて冷水を被り、身を淨めて神佛を拜し、それから仕事にかゝり、一生懸命に働きましたので、財產も相應に出來、少しは人に知られるやうになりました、今年は六十餘歲になりましたから、冷水を被ることなども止めて追ひ追ひ信心を起して、法義でも聽聞致度とおもふて居ります」と云々、後に禪師人に示して曰く、專藏の人物に就ては種々の評判あるも、兎に角金を得んが爲めに三十餘年間の奮勵をしたことは非常なるものあり、不淨財を得るにても、幾多の苦辛を要す、況んや佛祖の大道を荷擔せんもの、更に一層の奮勵をなさずんば、一生を空過し去らん」と。

○禪師と伊藤公との初相見

明治の元勲たる伊藤博文公が深く禪師の德風に歸崇したるは、普く人の知る所なるが、その初相見は明治廿七年の頃なりき、時方に日清の戰役闌にして、大元帥陛下は大蘿を廣島に進めたまひ、伊藤公は當時內閣總理たるを以て亦た扈從して大本營に在り、禪師、廣島に到りて天機を奉伺し、因みに參謀總長幷に諸大臣等を慰問して伊藤公と會す、談話を交換すること約一時間に過ぎざりしも、英雄英雄を知り好漢好漢を知り爾後、道交日を逐うてますく深厚を加へたりと云ふ。

○禪師伊藤公を訓誨す

伊藤公、曾て立憲政友會を組織し、渡邊金子末松等の諸氏を從へ偶々金澤に遊説し、因みに越前永平寺に詣て禪師を訪ひ、不老閣上、話境頗る進み、或は憲法起草の苦心を述べ、或は日清戰役の難事を談じ、過去の豐功偉績列擧し來りて暮の移るを知らざるものゝ如し、禪師默然として之を聽くこと稍々久うし、冷眼に一瞥して曰く、功勳を談ずる者は、猶ほ是れ功勳邊に滯る、功勳を忘じ去つて眞の功勳を立することを得べし、惜い哉、公は猶ほ是れ功勳邊に滯ることを免れず、何ぞ一歩を進めざる」と、是れ實に藤公頂門の一針にして、また盡忠報國の士の擧々服膺すべき好箇の敎訓なり、公の身心を捧げて一日も安處せず、始終君國に報効したる者、また或はこゝに因由するなきか。

○禪師と伊藤公との商量

伊藤公一日突如として禪師を芝の永平寺支院に訪ひ、禪師の室に入るや、公曰く「今日禪中の禪と俗中の禪と大に商量する所あらん」と、禪師、聲に應じて曰く「禪中の禪、俗中の禪何ぞ箇の兩般の閑名目あらんや」と喝破す、公手を拍て大笑す。

○禪師の儉德

世に大人の風格あるものは往々にして粗豪に流るゝの弊を免れず、禪師、超然として物に拘泥せず、淡然として些の凝滯無く、自ら大人の風格を存するも些の粗豪に流るゝが如きものを見ず、一片の故紙と雖も、能く保存してこれが用をなさしむ、接化の餘暇、時に詩文の稿を起するには、雜誌新聞紙の包

紙を用ふること多し、以てその儉德の一斑を知るべし。

○伊藤公護持の虛空藏菩薩

明治四十年一月三十日の事なりき、伊藤公突如として禪師を芝の永平寺支院に訪ひ、虛空藏菩薩の尊像を出し禪師に語げて曰く、此の尊像は南朝の忠臣萬里小路藤房卿の念持佛なりしが、不思議なる因緣にて予の手に入れり、依りて明治二十七年一月八日雲照和上に囑して開眼し、爾來今日に至る迄暫くも身邊を離さず常に護持せり、然るに近頃菩薩の右手に持し玉へる寶劍を失へり、願くは禪師予が爲めに寶劍を造り玉へと、之を禪師に囑す、又菩薩の略緣起を記することをも囑せらる、其の菩薩奉安の厨子には左の文字を刻せり。

扶桑靈場

奉經供養

また尊像の背後に左の文字を刻せり。

丙子五月廿五日忠死

爲

己丑正月五日菩提

文和三曆

遁倫隱士

また尊像の背後に左の三字を刻せり。

倔山拜

五月廿五日は楠正成公忠死の日にして、正月五日は正行公戰死の日なり、而して倔山は藤房卿の號なれば、是れ卿が楠公父子の菩提を弔はんが爲めに此の像を造り、自ら捧持して、全國の靈場を順拜せしものならん。

禪師は公の囑を請け、直に寶劍を造らしめ、左の一篇を添へて公に贈られたりと云ふ、惟ふに此の一話頭また以て公が平素信佛の念に篤かりしかを知るに足るべし。

伊藤侯爵念持虛空藏菩薩寶劍再製記

明治四十年一月晦日侯君辱ク弊廬ヲ訪ハレ、多年珍藏スル所ノ遁倫隱士倔山翁念持ノ虛空藏菩薩ヲ示サル、實ニ是レ稀世ノ靈像ナリ、因ミニ曰ク、

余偶々菩薩執持スル所ノ寶劍ヲ失フ、幸ヒニ補フ所アレト、乃チ靈像ヲ野衲ニ托セラル、直ニ工ニ命ジテ之ヲ造ラシメ、薰沐禮誦恭シク供養ヲ仰ベ、特ニ趨リ謹テ之ヲ呈ス。

夫レ虛空藏菩薩ハ大莊嚴國ニ住シ、福德威力ヲ以テ衆生ヲ攝取シ、智悲辯才寬廣無礙猶ホ虛空ノ如シ、能ク諸佛ノ正法藏ヲ護持シテ常ニ無量ノ功德財ヲ迎出ス、依テ大虛空藏ト號ス、楞嚴經ニ曰ク、手執四大寶珠照明十方微塵佛刹、化成虛空、乃至身同虛空、不相妨礙、大集大虛空藏菩薩所問經ニ曰ク、以大福德及大威力、而自莊嚴、以辯才莊嚴於語、以勝定莊嚴於心、以多聞總持莊嚴於念、以平等捨莊嚴於實、云云、加旃、菩薩ハ能ク闇眠ヲ離レ、能ク神通ヲ現ジ、能ク繩蓋ヲ除キ、能ク魔怨ヲ伏シ、諸〳〵ノ有情ニ於テ宜シキニ隨テ法ヲ說キ、諸道ノ中ニ於テ爲メニ正路ヲ示ス、故ニ如意珠ハ以テ恩德ヲ表シ、寶王劍ハ以テ智斷ヲ表ス、惟フニ楠公父子ノ忠、藤房公ノ節、三德二嚴自ラ其中ニ存ス、誰カ菩薩一分ノ權化ニアラズトセンヤ、今ヤ侯君ノ勢望威德古今ニ卓絕ス、而シテ常ニ此ノ靈像ヲ念持シテ暫クモ相離ルヽコト無シ、豈ニ亦虛空藏裏ノ大士ニアラザランヤ。

明治四十年二月八日　　永平住持悟山謹識

○伊藤公遺愛の銀碗

伊藤公が禪師に如何に歸崇するの厚かりしかは、既に記する所の如し、而して公の韓國に赴かんとするや寫眞一葉を禪師に呈して訣別の紀念とし（本書に掲ぐる所のもの是れなり）遂に兇手に斃るゝや、公の未亡人は公遺愛の銀製の茶碗と最終撮影の寫眞とを遺物として禪師に贈られたり、永平寺支院監院弘津說三師、これが記を作りて曰く

明治中興之鴻業。雖職由先帝及　今上之聖德。亦非不因補衮得其人也。而世推春畝伊藤公。以爲良弼中之第一。公師事吾性海慈船禪師。幾二十年於茲矣。樞機之暇。或詣祖山。或就輦下行院。參禪問道。針芥相投。心契尤密。己酉之春。予以事訪公於滄浪閣。相與話山雲談海月。公從容贊歎禪師曰。學識圓明。操持堅實。能通達事理。而超凡脫俗。毫無所罣礙。剛又勤于布化。席不暇煖。法輪所至。遠近翕然歸依瞻仰。洵爲教界中不世出之師表。是予所以欽慕不能措也。願禪師

恬淡無爲。一無所求於世。而德聲達于宸聽。令聞遍于海內者。蓋公等之皷吹。無非或使之然歟。是歲冬有哈爾賓之變。禪師時行化在山城。接訃哀悼不已。遽乘錫入京。會葬弔喪。情禮備至。今春公爵夫人贈公最終撮影併遺什銀碗於禪師。爲供紀念也。公嘗屢語人曰。百年之後必囑下炬于禪師。然其齡頗長於己。唯恐不保。無先遷化于他界。非因師資心契之密。安能如此哉。今也禪師鏗鍱而公則亡矣。實不堪今昔之感也。況又對其遺影。撫其遺愛。追想世復無如公信道至篤憂國至切者。則涕淚不覺滂沱也。予非才淺識。而久侍警室。又辱公之知。乃叙公及禪師之道交。以誌遺物傳承之所由焉。

永平悟由禪師法話集終

明治四十三年六月二十六日印刷
明治四十三年六月二十九日發行

編輯者　鴻盟社編輯局

右代表者　峯玄光

發行者　今村延雄　東京市芝區露月町十八番地

印刷者　太田音次郎　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

不許複製

發行所　東京市芝區露月町十八番地　振替口座東京貳九七九番　電話芝二千二十七番　鴻盟社

●大内青巒講述

碧巖集講話

洋裝箱入頗美本
全定價金二圓四拾六錢
送料

快絶妙絶天下唯一の稱ある碧巖集は大内青巒居士獨得の妙辯快舌に依りて一字一句の意義典據より一則一則の根本精神に至る迄縱横に説破せられ佛々の活眞髄祖々の暖皮肉を剔抉し來りて痛快を極む眞に禪學界の一大明星霧海の羅針盤と云ふべし

●加藤咄堂居士講述

大乘起信論講話

並製定價金五拾錢
送料金六錢
上製定價金六拾五錢
送料金八錢

五千餘卷の經論の精髄八萬四千の法門の要旨は擧げて起信論に在り眞如の妙體を論じては佛教哲學の根底を穿ち生滅流轉の相を説きては微を悉くし細を穿ち信仰と道德を談じては實踐の道程を示し佛教の哲學的宗教的價値は説て盡さゞるなし咄堂先生は高尚幽遠の論を講ずるに平易簡明の筆を以てし殊に最新の科學哲學を參照し何人にも解し易く講述せられたるものなれば起信論の妙旨を知る共に併せ最近の思潮に接することを得べし

發行所　東京市芝區櫻田町　振替口座東京貳九九七九　鴻盟社

鴻盟社發行書目

寂照和尚編 佛教大辭書 **大藏法數** 全二冊 定價四圓 小包料二十錢

境野黃洋著 **日本佛教史要** 定價一圓 小包料八錢

境野黃洋著 **印度支那佛教史要** 定價一圓三十錢 小包料十二錢

來馬琢道編 通俗 **佛教各宗綱要** 定價一圓五十錢 小包料十二錢

忽滑谷快天著 **禪學批判論** 定價五十錢 送料八錢

村上專精著 **佛教講論集** 定價一圓九十錢 小包料一二錢

藏海和尚著 **正法眼藏御抄** 全二冊 定價五圓 小包料二十四錢

藏海和尚著 **正法眼藏私記會本** 全二冊 定價五圓 小包料二十四錢

黃泉和尚著 **正法眼藏涉典續貂** 全六冊 定價四圓 小包料二十四錢

禪宗辭典 永源管長薗津寶全禪師著 **禪林象器箋** 全一冊 定價五圓 小包料二十錢

禪學向上錄 定價二圓五十錢 小包料十六錢

孤峰智璨師著 **日本禪宗史要** 定價六十錢 小包料八錢

正法眼藏 和語梯 闢邪訣 合本 定價三十錢 送料四錢

道心卷 三時業卷 歸依三寶卷 **正法眼藏私記** 定價十五錢 送料二錢

行持卷 佛向上事卷 **正法眼藏私記** 定價二十錢 送料四錢

五位顯訣元字脚 定價四十五錢 送料四錢

梶川乾堂著 **曹洞五位顯訣** 定價三十錢 送料四錢

梶川乾堂著 **唯識論大綱** 定價六十錢 送料六錢

梶川乾堂著 **俱舍論大綱** 定價六十錢 送料六錢

大內青巒著 **坐禪儀講話** 定價二十錢 送料四錢

大內青巒著 **禪學三要**（三同契寶鏡三昧 五位說講議） 定價三十五錢 送料六錢

禪學寶典 定價一圓 小包料十二錢

大內青巒著 **佛教大意** 定價十五錢 郵料二錢

峯玄光編 現代名家 **最新佛教演說軌範** 定價五十錢 送料六錢

來馬琢道編 **禪學活問答** 定價三十錢 送料六錢

大內青巒著 **戊申詔書衍義** 定價十五錢 送料二錢

弘津說三著 **承陽大師御傳記** 定價七十五錢 小包料八錢

弘津說三著 **承陽大師聖教全集** 全三冊 定價三圓 小包料廿四錢

新井石禪老師著 **曹洞宗要法話** 定價三十錢 送料六錢

大內青巒著 **六方禮經講話** 定價十五錢 送料四錢

大內青巒著 心地觀經 **報恩品講義** 定價七十錢 小包料八錢

荒木磯天著 **仙術** 定價三十錢 送料六錢

大內青巒著 **般若心經講要** 定價二十錢 送料四錢

新撰 **四節引導抄** 法名字撰附 定價四十錢 送料四錢

大內青巒著 **修證義綱要** 定價三十錢 送料六錢

西有禪師著 **禪戒抄講話** 定價七十錢 小包料八錢

鷲尾順敬著 **禪宗史要** 定價十五錢 送料二錢

來馬琢道著 叢林必携 **禪門寶鑑** 定價八十五錢 並製七十五錢 小包料八錢

加藤咄堂著 **修養清話** 定價三十五錢 送料六錢

加藤咄堂著 **婦女の修養** 定價三十五錢 送料六錢

大內青巒著 **謠曲禪話** 定價二十錢 送料六錢

雲照著 **天覽いろはの義解** 定價十五錢 送料四錢

大內青巒著 **修證義聞解** 定價二十五錢 送料四錢

空華談叢 定價三十錢 送料四錢

町元呑空師
冠註無門關　定價五十錢　送料四錢

校訂 熊田貞洞著
維摩經日講左券　定價八十五錢　小包料八錢

註釋
八宗綱要　定價三十五錢　送料六錢

正法眼藏出家功德卷　定價十五錢　送料二錢

洞上 新井石禪師著
法服格正　定價三十五錢　送料六錢

修證義說教軌範　定價一圓二十錢　小包料金八錢

性海慧船禪師喜壽祝賀紀念出版
永平悟由禪師法話集　定價五十錢　送料六錢

瀧谷琢宗禪師著
修證義筌蹄　定價十五錢　送料十四錢

面山著
金剛經聞解　定價四十錢　送料六錢

慈雲著
金剛經講解　定價四十錢　送料六錢

道元禪師御講述 永平初祖
學道用心集提耳錄　定價五十錢　送料六十錢

西有禪話　定價三十五錢　送料六錢

桑門著
撰擇集講義　定價一圓五十錢　小包料十二錢

堀口周道著
信心銘夜塘水講義　定價七十錢　送料八錢

來馬琢道著
列傳體日本佛教史 各宗高僧傳　定價一圓三十錢　小包料十二錢

水野靈牛著
西國三十三ヶ所觀音靈場 御詠歌說教　定價五十錢　送料六錢

上宮教會編
法華經八卷縮刷　定價六十錢　送料六錢

上宮教會編
勝鬘經縮刷　定價十五錢　送料四錢

上宮教會編
維摩經縮刷　定價二十錢　送料四錢

天台四教儀縮刷　定價十錢　送料二錢

原人論縮刷　定價五錢　送料二錢

坐禪用心記落草談　定價三十錢　送料六錢

峰上禪師著
十種疑問落草談　定價十四錢　送料五錢

西有禪師著
辨道話講義　定價二十錢　送料四錢

松田泊堂編 現代名家
禪學評論　定價五十錢　送料八錢

大內青巒著
禪學大意　定價五錢　送料二錢

境野黃洋
時代宗教　定價四十錢　送料六錢

宗教研究會編
宗教大觀　定價六十錢　小包料八錢

曹洞宗教講習院
講演集　定價二圓五十錢　小包料二十錢

井上博士
圓了講話集　定價七十錢　小包料八錢

一經禪靈難義問答鈔　定價十五錢　送料二錢

西有禪師著
禪戒訓蒙　定價二十錢　送料四錢

村上博士
起信論達意　定價二十錢　送料四錢

瑩山禪師著
信心銘拈提　定價二十錢　送料四錢

加藤咄堂著
十種勅門　定價八錢　送料二錢

曹洞宗說教大全　定價一圓五十錢　小包料十二錢

水野靈牛著
曹洞宗修證義說教講錄　定價一圓　小包料八錢

大內青巒著
結制の由來　定價五錢　送料二錢

忽滑谷快天著
英和對照 修證儀坐禪儀合本　定價十五錢　送料四錢

善惡業報因緣集　定價四十五錢　送料六錢

渡邊國武著
禪機と哲學　定價十五錢　送料四錢

小野藤太著
洒落文庫　定價三十錢　送料四錢

佛教八面觀　定價三十錢　送料四錢

新井石禪師著
僧月照傳　定價十五錢　送料四錢

教林指月　定價三十錢　送料六錢

抵掌老人　見聞寶永記　定價二十五錢　送料四錢

大澤天仙著　大石良雄　定價十五錢　送料二錢

大澤天仙著　聖德太子　定價十五錢　送料二錢

釋宗演禪師著　佛祖三經講義　定價二十五錢　送料六錢

岡田摘翠著　禪學綱要　定價七十五錢　送料八錢

沙門師鑑禪師撰定　扶桑撰述　延寶傳燈錄　和本　定價七圓　小包料三十四錢

吉田義山編　首書訓傍　瑩山傳光錄　全二冊　定價八十五錢　小包料八錢

町元春空編　增冠傍註　佛祖三經指南　全二冊　定價七十錢　小包料八錢

古田定仙編　增冠宏智禪師頌古　全二冊　定價七十五錢　小包料八錢

佛祖正傳　禪戒鈔　定價二十五錢　小包料六錢

毎月一回發行　布教雜誌　傳道護法

毎月一日發行　定價一錢九厘　一部郵稅五厘　一ヶ年郵稅共二十四錢

毎月十日發行　一部定價六錢五厘　一ヶ年郵稅共八十錢

○御注文の注意○

一、「注文」御注文の書籍は前金到着の上ならでは一切送附不申候

一、「代價」書籍代價は郵送料共御計算の上振替貯金、郵便爲替、郵便切手又は銀行爲替其他御便宜に任せ御送の事但し郵便切手代用の節は一割増の事（即ち代壹圓なれば壹圓拾錢封入の事）

一、「振替貯金」東京二九七九へ御送金相成候節は最も安全に凡て手數料爲替料等を要せず無料にて送金出來申す可く候されど振替貯金扱の手續上二三日延着致候に付豫め御含み置被下度候但し口座登記料壹錢御加入被下度候

一、「送本」御注文書籍は注文狀來着の當日若くは二日以内に發送仕候（即ち本社出版物は其當日他店出版物にして取寄の必要ある者は其の日より二日内）依て郵送に要する相當の日數を經るも着本無之時は速かに其旨御通知可有之即ち當社にては直ちに取調相當の手續可仕候

534
189

7.12.20

324
189

324
189

019354-000-2

324-189

永平悟由禅師法話集

鴻盟社編輯局／編

M43. 6

ABG-0045